



親水の大事

作家 山本一カ

ひとしずく



大川（隅田川）の東側、深川。

「水の都」と称されることが多い深川の興りは、江戸時代初期にまでさかのぼる。

明暦三（1657）年一月十八日に出火した明暦の大火は、二十日になってやっと鎮火した。

消火できたわけではない。燃え尽きたのだ。大半が焼け野が原になったがため、公儀は江戸の町造りを根本からやり直す決断をした。

各地に火除け地を設けて道幅も広げ、

延焼対策を講じた。江戸城天守閣まで焼け落ちたのも、延焼を防げなかったからだ。

町造りの一環として、埋め立ても断行した。慶長八（1603）年の江戸開府以来、江戸の人口は膨張を続けていた。新たな居住地造成には埋め立て地での対処を決めた。

大川東側の埋め立てに際して、公儀は明確な都市計画図を作成した。江戸に廻漕される諸国からの物資集散地とし

て、埋め立て地活用を考えたのだ。

水運に便利な水路を縦横に張り巡らせた。

江戸復興には建材となる丸太が欠かせない。いかに組んだ材木水運の便を考慮し、大川と結んだ堀に面して木場も設けた。

材木商、川並（いかだ乗り）、大工・左官・鳶・鍛冶屋など、建築関連の商人と職人が、大挙して埋め立て地に移住した。

深川の地名は、町と町とを結ぶ掘割の多さと、水運に適した運河の深さから生まれた、ともいわれている。

*

埋め立て地はその当初から、飲料水の確保が深刻な問題となっていた。

元来が海だった場所を埋め立てただ。井戸を掘っても塩辛い水しか出なかった。

承応三（1654）年頃には、大川の西側と、埋め立て地以外の東側である本所や亀戸には、上水道が行き渡っていた。





隅田川の東側を流れる平久川（へいきゅうがわ）と大横川の合流点。こうした堀が、江戸・東京の復興と発展に大きな役割を果たした

水道の名はついてしたが、神田川や玉川などの清流を樋で張り巡らせただけだ。高低差を使った水道の果ては、江戸城の道三堀に落とされていた。

落ちる余水を船の水槽に汲み入れて、深川各所に給水した。水源（水道や井戸）に恵まれた他所では見られない、深川ならではの「水売り」稼業が存在していた。

暴れ水（洪水・水害）との闘いは、現代も日本中で続いている。

深川はしかし、埋め立て地誕生時から水とは闘うのではなく、親しんできた。

いまも青海・海辺・枝川・扇橋・塩浜・潮見・白河・豊洲・深川・若洲などなど、水にちなんだ地名が多数残っている。

親水公園では名称通りに、だれもが水に親しんで遊ぶこともできる。

川や運河には橋が架かっている。深川エリアの古い橋には「御船橋」「亀久橋」「黒船橋」「鶴歩橋」「万年橋」などのように、架橋当時を思わせる味な名称が付けられている。

水は生きる根源であり、治水はなにもまして重要であろう。

願わくば水との闘いではなく、親水を掲げて治水検討をいただけますように。

山本一力（やまもと いちりき）

1948年高知県生まれ。14歳で上京し、高校卒業後、旅行代理店やコピーライター、航空会社関連の商社など十数回の転職を経て、1997年に『蒼龍』で第77回オール読物新人賞を受賞する。2002年には『あかね空』で第126回直木賞を受賞。ほかに『損料屋喜八郎始末控え』『大川わたり』『深川黄表紙掛取り帖』『だいこん』『ほかげ橋夕景』など多くの時代小説を執筆。また、自伝的小説として『ワシントンハイツの旋風』がある。